



TITLE:

南朝貴族制の沒落に関する一考察

AUTHOR(S):

川勝, 義雄

CITATION:

川勝, 義雄. 南朝貴族制の沒落に関する一考察. 東洋史研究 1962, 20(4): 472-496

ISSUE DATE:

1962-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148232>

RIGHT:

南朝貴族制の沒落に關する一考察

川 勝 義 雄

- 一 序
- 二 莊園の變質
- 三 貴族と商人
- 四 貴族と俸祿
- 五 侯景の亂と貴族の社會的勢力
- 六 陳朝における貴族の政治的實力
- 七 結語

一 序

六世紀中葉の侯景の亂によって貴族が沒落したという見解は、すでに早く岡崎文夫博士の次のような言葉に表われている。しかし博士は「陳書列傳を通覽するに、只一人北齊に使した徐陵を除くの外、多くは武將より身を拔んでた人物で滿たされている。事實侯景の亂に於て南朝第一の名

家王氏の一族全く亡び、其他の名族多く他郷に遁竄した如く……」（『魏晉南北朝通史』三三八頁）と極言されたために、のちに竹田龍兒氏の疑問をひきおこすことになった（『侯景の亂についての一考察』史學二九卷三號・五六頁）。竹田氏が批判されたように、たしかに右の岡崎博士の言葉は誇張にすぎるものであり、「侯景の亂において南朝第一の名家王氏の一族は全く亡び」去ったのでは決してない。琅邪の王氏や陳郡の謝氏は陳朝においても相變らず、令僕などの高位高官にのぼっているのである。にもかかわらず、私は南朝貴族制の崩壊を、侯景の亂にはじまる梁末陳初の混亂期において認めることができると思うのであつて、それがいかにして、またいかなる理由によってであるかを考えようとするのが本稿の課題である。

その際、まず断っておかねばならないことは、南朝貴族制が東晉初期のいわゆる北來貴族を中核として成立していることであり、王・謝の二氏を代表とする北來貴族なくしては、南朝貴族制を考えることができないということである。従つて本稿においても、これらの北來貴族を念頭におき、殊に謝氏の場合を中心として、これによって南朝貴族の没落過程をさぐるうと思うのである。

ところで私は別の論稿^①において、六世紀前半の南朝は、梁の武帝の治下に未曾有の黄金時代を出現したのに對して、六世紀中葉以後は全く對照的に、救いようのない大混亂に陥つていったことの理由を説明しようとした。そしてその理由の一つとして、南朝における貨幣經濟の發展という問題が極めて重要な意味をもっていることを指摘し、その面から當時のもろもろの社會現象を理解してみたのである。すなわち、南朝經濟の根底には、生産力の發展と商品交換の漸増にもなつて、貨幣經濟は上昇過程をたどるにもかかわらず、南朝社會に流通する通貨の總量がそれに應じて増加しなかったために、貨幣不足の現象が次第に激化するという基本的な矛盾があった。しかるに貨幣不足の現

象に對する南朝諸政府の通貨對策は一貫性を缺き、そのために各種の貨幣がいりみだれて、社會には貨幣的な二重構造を生じた。貨幣經濟の進展とその底に存在する相對的な貨幣不足状態は、農村の慢性的不況と農民負擔の過重を來すに反して、貨幣的二重構造と地方的時期的物價差を利用する商人の活躍をうながし、農業人口から商業人口への流入が増加した。それは一つには商人層の擡頭をもたらし、二つには半失業的商業人口の増加をつくりだす。商人層は貨幣的經濟的二重構造と、封建的經濟外的特權の制約とによって、必然的に封建的權力へのつながりを求め、その機構の中に食い入つてゆく。一方では、流亡農民と半失業的商業人口を吸収した土豪將帥層は軍事的實力を次第に高め、梁朝政府の軍事機構は事實上、彼らの力に依存してはじめて存続を維持するという事態にたちいた。かくて土豪將帥層と商人層は互に關連しあいながら、政府機構の内部においても、下から次第にその實力をより上げ、上においかぶさる王公貴族などの上層階級を、やがてははねのけるべき必然性をはらんでいた。梁の武帝の鐵錢政策が失敗したのち、この必然性は加速度的に進行し、社會的矛盾

が爆發寸前にまで進んだとき、侯景の行動がその導火線の役割を演じたのである。

私は侯景の亂にはじまる約二十年間の大混亂が何故に起ったかという疑問から出發して、南朝社會がつき進んでいった過程を以上のように理解してみた。しかしそこでは商人層と土豪將帥層の擡頭の面に力點をおいたために、盾の反面である貴族の沒落という問題について考察することが少かった。従っていま貴族の沒落という問題を取りあげるにあたって、まず右のような視角から、貨幣經濟の進展が貴族の經濟生活にどのような作用を及ぼしたかという問題から最初に入つてゆきたいと思う。私が別稿でのべたごとく、もし南朝の貨幣經濟が相當高度に發展していったと認められるならば、それは一般的に言つて、貴族の經濟的地盤を崩す方向に作用したと考えることは一應可能である。しかしその崩壞過程を具體的に當時の史料に照らして追跡しようとする場合、我々は直ちに史料不足の壁につきあたらなければならぬ。従つて以下の考察は必然的に具體性を缺くうらみを免れることはできないのであるが、一應輪廓だけでも明らかにしておくことは、今後の探究のために

無益ではないと思われる。そうして貴族の弱體化が、より一層具體的に社會的政治的側面において看取できる點をあわせて考察し、經濟面の考察において免れがたい抽象性を補つてゆきたいと思う。

二 莊園の變質

江南の貴族の經濟的地盤はその大土地所有、すなわち莊園經營にあるというのが、周知のごとく殆んど定説となつてゐる。その典型的な例は謝氏に見られるわけであつて、謝靈運の有名な山居賦にうたわれた莊園などを別としても、四世紀中葉に活躍した謝安以來、その子の瑛、孫の混、および混の甥の弘微の家系には、代々經營維持されてきた廣大な莊園があつた。それは謝氏のうちのこの一家だけで、田業十ヶ所以上、僮僕千人のほか、會稽・吳興・琅邪の各地に散在する莊園と、これに附屬する數百人の僮僕を合せた大規模なものであつた。そのうちの多くは、四三二年に謝混の妻の東郷君が死んだのち、女婿の殷叡が賭博の負債を償却するために費消してしまつたといへ、謝弘微が「(遺産の) 分け前は多く、それに共るものは少く、

乏しきこと有るに至らず」といっている以上は、この一家にはなおかなりの莊園が残っていたであろう（宋書卷五八・謝弘微傳）。このような莊園の經營方法について具體的なことは全く分らないのであるが、莊園の所在が分散していることから見ても、その殆んどが顔之推のいわゆる「僮僕に信せてこれをなす」方式（顔氏家訓・涉務篇）、つまり現地における實際の管理は守國人などと呼ばれる部下にまかせ、そこから上る年貢を中央に送らせるところの、いわゆる間接經營の方式であったことはまず誤りないであろう。

「一錢尺帛の出入をもみな文簿につけた」といわれる謝弘微にしても、遠隔地の細かい收支については部下からの報告を信用せざるをえず、時に監督者を派遣するか、自ら出かけてゆくかといった程度であつたにちがいない。

ところでこのような莊園に對して、貨幣經濟の進展はいかなる作用を及ぼすであろうか。一般に當時の莊園は、典型的には謝靈運や孔靈符^⑤の莊園に見られるように、封鎖的な自給自足經濟の上に成り立つと觀念せられている。しかし首府建康のごとく、多數の人口をかかえて消費都市の様相を呈しているところでは、その周辺の莊園がそのような

封鎖性を保ちつづけることは困難であろう。そして貨幣經濟が進展するにつれて、莊園の封鎖性が崩れる程度はいよいよ深まり、その影響は地域的にもいよいよ廣範圍に擴大してゆくのは當然である。五世紀の中ごろ、秦淮南岸の婁湖に廣大な莊園を經營していた沈慶之が、いつもその土地を指して「錢ことごとくこの中にあり」と言っていたという話は、沈慶之にとつて莊園は錢を獲得するための手段と考えられていたことを示している（宋書卷七七・沈慶之傳）。すなわちこのころになると、首府周辺の莊園所有者が完全に換金を目的として莊園を經營しはじめていたのである。

そしてちょうど同じころ、同じ秦淮南岸に莊園をもっていた柳元景は「家中の啖に供するために菜を種える」、つまり依然として自給のための莊園という考えを固執していたのであるが、その數十畝の菜園では守國人が勝手に生産物を賣つて二萬錢の收入を得ているのである（同上・柳元景傳）。柳元景のこの話の前文に書かれているように、沈慶之をも含めて「當時、在朝の勳舊は多く産業を事としており、ただ元景だけは經營する所がなかった」のであって、一般にはすでに「産業を事とする」ことが普遍に行われ

ていたのである。「産業を事とする」とは、具體的に莊園經營の場合についていえば、柳元景のように自給自足を目的として經營するのではなく、沈慶之のごとく現金取得のために、商品生産の場として莊園を經營することを意味している。そして「錢を取る」ことを目的として産業を事とする場合には、さらに進んで、莊園から生産される商品ができるだけ有利に販賣するために、倉庫を作り、運送と商業に手を出してゆくのは當然の趨勢である。それは貨幣經濟の進展にともなう必然的な方向であって、六世紀の梁代において、徐勉の「門人故舊がしきりに便宜の策を（徐勉に）薦めて、貨殖を聚斂せしめる」方法を計畫したとき、「或は田園を創闢せしめ、或は邸店を興立せんことを勧め、或は舳艫もて運致せんと欲した」のはそのことを示している（梁書卷二五・徐勉傳）。徐勉はこの計畫に従わず、清貧で通したことを強調するのであるが、しかし右の計畫は當時の一般の企業のあり方を示すものであろう。そこでは倉庫と運送手段をもった企業主にとって、田園の經營は利潤追及を目的とする彼の全企業體系の中で、商品生産を受けもつところの、いわば生産部門となっているわけである。

このように貨幣經濟の進展は莊園經營の意味と方法を大きく變えてゆくのであり、それが最初は自給自足を目的として經營されていたとしても、やがて貨幣經濟の進展にともなう、莊園生産物を換金し、さらに進んでは利潤追及の手段として莊園を經營する方向に進まざるをえないのである。

このような莊園の性格轉換は以上にみたように五世紀から六世紀にかけて進行してゆくのであるが、この趨勢は間接經營の上に成り立つ貴族の莊園において、守園人や門人故舊など、貴族の下にあって實際の經營に當るものが、その間に利益を得る機會を増すことになる。そのことは先にあげた柳元景の守園人の場合に明らかに表われている。莊園所有者が柳元景のように「榮を賣って錢を取り、百姓の利を奪おうとは思わない」といった考えを固執し、土地生産物からのより有利な収益方法に無知であるか、或はそのような方法をとることを屑しとしない場合には、その下にある守園人が貨幣經濟の進展に乗じて、莊園生産物から適當に利益を得てゆくことは極めて容易であらう。一般に「江南の朝士たちは、一かきの土をスキで起すのも、一株

の苗をくき切るのも目で観たことはなく、何月に種をまき、何月に收穫するのも知らない」という傾向にあったとすれば（顔氏家訓・渉務篇）、莊園の營利事業への變質が、莊園所有の朝士に對してよりも、むしろその下にいる守園人層の方に有利に作用したと考えることは不合理ではない。實際に政治上において、庶務に勤めることが鄙しまれ、文簿をみるものが風流に反するという意識は、本來貴族がかもし出した空氣であつて（梁書卷三七・何敬容傳）、それは單に政治に關する文書のみならず、經濟上の文書に關しても妥當することであらう。このような意識に最も深く感染しているものは一般的に言つて傳統を誇る貴族である。例えば先にあげた廣大な莊園所有者・謝弘微の子の謝莊は「貴戚が利を競い、貨を塵肆に興し」つつあるとき、「大臣の祿位にあるものは、尤も宜しく民と利を爭うべからず」と言っている（宋書卷八五・謝莊傳）。謝莊がこの意見を發表したのは四五三年であつて、このころはすでに宋のはじめ四二〇年ごろにくらべて、錢の購買力は二倍近くにはね上つていた（別稿參照）。謝莊が主張しているごとく、もし謝弘微・謝莊父子が「民と利を爭う」ことをせず、莊

園生産物を一切換金していなかったと假定するならば、そして守園人が勝手に換金した場合に柳元景のごとく守園人にそれを與えたと假定するならば、錢を所有した守園人の財産はおのずから倍近くにふくれ上り、それに反して謝莊の財産は相對的に激減したことになる。これはもちろん極端な場合を假定したにすぎないが、金錢取得を屑しとしない貴族の莊園で、しかもその經營が或る程度守園人にまかされている場合には、莊園から上る貴族の收益は世の中の經濟の進展に比して相對的に低下をつづけ、反對に經營をまかされた守園人の所得は換金によつて相對的に向上していったと考えることができる。少くとも貨幣經濟の發展の波に乗つて、それをフルに利用しながら錢貨の蓄積をつづける一般の商人的寒人の前には、商行爲を蔑視する意識にとらわれがちな貴族が常に立ちおくれを演じ、經濟的實力において前者の比重が次第に重く、後者のそれは次第に輕く、かくて貴族が經濟的に徐々に寒人によつて押されてゆく形勢にあつたことは確實である。先にのべたように、謝弘微のときには、叔父の謝混が残した遺産の「分が多く」、「乏しきこと有るに至らなかつた」その財産狀況は、二十

年あまりのち、その子の謝莊に至って、はやくも「家もと貧弊にして宅舎いまだ立たず、兒息は麤糲を免れず」という状態になったらしい（前掲・謝莊傳）。この言葉はまともに受けとれない單なる表現のあやであるかもしれないが、そこに貴族の經濟力の弱화는掩いがたく表われているように思われる。このころにおける貴族の貧困を示すものにはなお袁粲の場合がある。彼の家は「飢寒足らず、母の琅邪の王氏は……みずから績紡を事として以て朝夕に供していた」のである（宋書卷八九・袁粲傳）。

ここで注意しておかなければならないことは、先にあげた沈慶之や徐勉のごとき裕福な人々は南朝貴族の代表というよりも、むしろそれ以下のクラスから出た武將であり、中堅官僚であるということである。それに加えて、南朝において盛んに行われる山澤の圍い込みは、王族のそれが最も目立ってくることにこのころ（465）から「幸臣近習が山湖を封略し」はじめてきたことも注意しておかねばならぬ（宋書卷五七・蔡興宗傳）。南朝において山澤の圍い込みを行うものは魏晉以來の名族とは限らない。それを行う豪右とか富室豪家といわれるものの實體は、單に

貴族のみならず、いわゆる寒人として貴族社會から排斥される部類の人々もまじってくるのであって、我々は「豪右」の實體の變化を注意しなければならないと思う。

貴族の莊園經營に對する貨幣經濟の影響は以上にのべたごとく、まずその莊園からの現物收入の價值を低下させるのであるが、しかしもちろんそれだけでは必ずしも貴族の經濟力の減退をもたらすとは限らない。貴族ももとより舊態依然たる封鎖的な莊園經濟だけに頼ることはできるはずもなく、經濟生活において錢の占める比重が大きくなるにつれて、新しい金錢取得の方法を講じたにちがいないからである。次にその點を考えてみよう。

三 貴族と商人

新しい金錢取得の方法は先ず莊園生産物を換金することであつたろうが、その場合、貴族は輕蔑すべき商販行爲を自らの手で行うよりも、より簡単な方法として商人に販賣を依託する方法をとつたと思われる。すでに東晉のごごろにおいて、貴族の別莊地帯であつた會稽山陰では、貴族と商人の結託が顯著に現われている。初學記卷二四に引く王

彪之の「整市教」には、「近ごろ山陰の市を検するに、多く法の如くせず。或は店肆錯亂し、或は商估没漏し、豪彊の名を假冒し、貿易の利を擁護し、平弱の人を凌踐し、専ら要害の處を固む。屬城、寛を承け、亦皆かくの如くす」という。商人が豪彊の名を假冒して貿易の利を守るのは、當時の貴族のもつ特權を利用して、商業上の利益を得たのにちがいない。南朝では、陳の至德はじめ(563)まで「軍人・士人の二品清官には並びに關市の税なし」という規定があつた(南史卷七七・沈客卿傳)。この規定がいつ制定せられたか未だ詳にしないが、貴族の優勢な東晉時代において、これに類する特權が貴族に認められていたことは確かであろう。とすれば、商人の側からいって、貴族の名において商行爲を行う場合には、關税と市税を合法的に免れることができたわけであつて、商人にとってそれは大きな魅力であつたにちがいない。かくて貴族が自己の莊園からの生産物を賣捌くために商人を必要とし、他方商人はそれによって貴族の名を假り、その特權に便乗して獨自の商行爲に大きな利潤をあげることができたとすれば、兩者の相互依存は決定的となるであろう。

唐長孺氏は、南朝において王公貴人に附着した左右・門生の類には富裕な商人が多いということ、そして彼らが身を屈して、相當な錢を納めてまでも門生にしてもらつた理由は、單に國家の課役を免れるためだけではなく、右にのべたような王公貴人の特權を利用して、自己の商業活動に大きな利益を得るためであつたということを明確に指摘した(『魏晉南北朝史論叢編』所收「南朝寒人的興起」第三章)。これは卓抜にして極めて重要な指摘である。王公貴人は金錢取得の必要から商人を利用し、それを自己の門生ということにして、自己のもつ封建的特權の利用を商人に許した。商人は王公貴人の門生となることによって、その保護のもとに主家のもつ封建的特權を利用し、自己の商業活動を有利に行うことができた。この場合、門生が主家にさし出す束脩はその本來の意味を失つて、實質的には主家の封建的特權を利用して利潤をあげた商人が、その利益配當の意味で、或は特權使用料の意味で主家に渡す冥加金の意味に變っているわけである。顏竣に對する四五八ごろの彈劾文に次のような一節がある。「凡そ顏竣の任に莅みし所にては、皆政刑の宜しきを闕けり。輒ち丹陽の庫物を開き

て吏下に貸借し、多く資禮を假りて解して門生となす。朝に充ち野に滿ち、殆んど千を以て計らる」と(宋書卷七五・顔竣傳)。これは丹陽尹であつた顔竣が官物を部下に融通し、その利子を門生の資禮という形でとり立てたのであらうと、以前私は理解した(『魏晉南北朝の門生故吏』東方學報二八所収・一九二頁)。しかしそれは單なる利子ではなく、そのうらに商業活動をともなつたものと解する方が合理的である。なぜなら、それを借りたものは單に部下だけではなく、「野に滿つる」多數の人々が顔竣の部下を通じてこれを借りているからである。彼らがこれを借りて資禮を納めたゆえんのは、單に一時的な窮乏を補うためではなく、彼らがそれを資本にして商業活動を行い、官物借用の特權を許された代償として、一種の冥加金をその利子とともに門生の資禮という形で上納したと解する方が、より一層合理的であるように思われる。このような方法は、倉庫に眠る官物を活用して、郡衙の収入を増す妙案であるとともに、商人の側においても資本力の増加に役立ち、商業活動を活潑にして利潤を上げることができたであらう。右の一節をこう解して差支ないとすれば、當時の門生が上納す

る資禮とは、全く經濟的な意味で、特權利用に對する冥加金、或は資本借用に對する利益配當金の意味を帶びていたと考えることができる。このような門生の出現は、當時の門生の主家に對する關係についても再考を促す重要な問題であるが、その點については今はふれない。

以上のように、王公貴族と商人とは門生というヴェールをかぶつて結びつき、資禮という名目の冥加金を媒介として經濟的につながつてゆくのである。それは商人の立場からすれば、當時の貨幣的經濟的二重構造と、封建的經濟外的特權の制約のもとで、商業活動を有利に行うために必然的に志向する方向であつた。貴族の側からいっても、貨幣經濟の進展にともなつて、現金収入の必要が増すにつれて、このような形で間接的に商業活動に加わり、そこからの現金収入をはからざるをえなかった。こうして貴族の經濟生活は、はじめ莊園からの現物収入を主たる財源としていた狀況から、次第に右のような形で商人に依存し、間接的に商業活動に参加して、そこからの現金収入に頼る部分が多くなる。それは自然經濟から貨幣經濟への發展過程において、貴族が經濟的に立ちおくれつつも、なおその經濟

力を温存し、維持してゆくのに役立ったと思われる。

しかしここで注意しておかねばならないことは、そのような傾向が進むにつれて、貴族の商人に對する依存度が高まり、貴族の經濟面における寄生的性格が強まることである。もともと貴族の莊園經營そのものが間接經營であつたとしても、自然經濟の時代には貴族と使用人との間には緊密な主従關係があつて、貴族の莊園經營は相當強固であつたはずである。それが今や貴族と商人的門生との關係においては、傳統的な尊卑の觀念が残存するにしても、一切が金錢をもつてはかられるという、いわば單なる取引關係の方向に進むであらう。貴族の商人的門生に對する支配力ないし規制力は、舊い莊園使用人に對するそれとはもはや同日の談ではない。そして貴族の商人に對する依存度が増すにつれて、ついに實質的には貴族が商人に養われる形となる。寄生的とはこういう形をいう言葉であらう。貴族ははじめから王朝に寄生しているのではない。それは貨幣經濟の進展にともなつて、生活の基盤そのものが寄生的となつてゆくのである。そして商人が貴族を養うのは、一つには貴族が依然として持っている封建的特權を利用するため

あり、二つには國家豫算の使用と俸祿の形で貴族が國庫から引出すことのできる良質の貨幣を得るためであつた。そのほか、貴族所有の莊園や山澤からその產物を安く仕入れる目的もあつたであらう。しかし封建的特權と貴族のもつ良質貨幣の二點は商人を貴族に引きつける重要な源泉であつたと思われる。貴族はこの二點によって、なお商人を自己の前に跪まずさせることができたのである。

しかし封建的特權と國家豫算の使用量において貴族よりも優位にあるものがいた。それはいうまでもなく皇帝と王族であり、さらにはこれに直結してその威を借るところの恩倖的寒人であつた。尨大な豫算を消費する重要な地方軍府は宋以後ほとんど王族が主宰した。利にさとい商人たちが貴族よりもむしろ王族と恩倖に結びつくのは當然である。かくて王族と恩倖は貨幣的二重構造と封建的特權の頂點に立ち、それをフルに利用して尨大な私有財産を蓄積した。それはすでに立ちおくれた貴族の蓄積をはるかに上廻り、貴族の相對的な經濟力の低下はここにも現われてくる。そして貨幣財の尨大な蓄積は當然に消費ブームをまきおこす。一般的に言つて、聚斂能力の薄弱な貴族が消費ブ

ームの中にまきこまれるとき、その経済力はさらに低下してゆくであらう。梁代はまさにそのような消費ブームが一般の風潮となった時代であった。その際、地方官のポストは消費を補うべき聚斂のチャンスであった。にも拘らず、梁代の貴族の中には地方官として清廉であったといわれるものが多く、中には記念碑を立てられたものもあった^④。それはすなわち貴族の聚斂能力の薄弱さを示すものである。かくて貴族の収入において、低下することの少い最も安定した部分は俸祿だけとなり、貴族の全収入において俸祿の占める比重が次第に大きくなって、これが彼らの最も重要な財源となるに至ったのではなからうか。

四 貴族と俸祿

周知のように、江南の士人の経済生活における俸祿の重要性については、すでに顔之推がのべている。「江南の朝士は晉の中興によって南のかた江を渡り、卒に羈旅となつて今に至るまで八・九世。未だ田に力むるものあらず、悉く俸祿に資って食うのみ。たとえ有るものも、みな僮僕にまかせてこれを爲す」と（顔氏家訓・涉務篇）。私は果して顔

之推のいうように、東晉以來、朝士のほとんどが「悉く俸祿に資って食うのみ」であったかどうか、いまなお疑問に思う。しかし顔之推が現に見、かつ父母から話に聞いた時代、すなわち梁代においては少くとも殆んどすべての朝士は俸祿生活者になっていたのである。もしそうだとすれば、梁代における経済の動きは俸祿生活者にとって、どのような作用を及ぼしたであらうか。

五二三年、通貨は鐵錢に切りかえられ、五二七年、百官の俸祿は原則としてすべて見錢をもって支給されることになった。もしこれが詔勅のとおり嚴密に施行されたとすれば、官吏の俸給は五二七年以後、すべて鐵錢で支給されたことになる。しかるに鐵錢の價值はやがて急速に下落し、おそくとも五三五年以後になると、いたるところ鐵錢は山のごとく積まれ、物價騰貴はとどまるところを知らない有様となった（別稿参照）。このようなインフレ時代において鐵錢を支給される俸給生活者はその經濟的基礎に壊滅的な打撃をうけることは明白である。もし當時の朝士が、顔之推のいうように、「悉く俸祿に資って食うのみ」であったとすれば、この狀況は官界に恐るべき恐慌を來し、それは

必ずや重大な政治問題に發展したであろう。もし事實そうであれば、現存する少い史料の中にも、もう少しその影響を傳えるものが残っていてもよい性質のものである。それが殆んど残っていないということは、當時の朝士が例えば徐勉のような方法で、俸祿以外に収入をはかる手段をもっていたと想像するほかない。しかしこのようなインフレ現象が貴族に與えた打撃の大きさを示す史料はかすかに残っているのである。

「謝舉の兄の子の僞、字は國美。父の玄大は梁に仕えて侍中たり。僞はもと貴なるに、嘗って一朝、食なし。その子、啓して班史を以て錢を質せんと欲す。答えて曰く、寧ろ餓死せんも、豈これを以て食に充つべけんや」と。太清元年卒す」(南史卷二〇・謝僞傳)。すなわち太清元年(549)以前において、すでに名門謝氏の一族、しかも先般來ししばしば引用してきた大莊園主・謝弘微の子孫は、經濟的にここまで追いつめられているのである。謝舉およびその兄の謝覽は梁代において位人臣を極めたといってもよいほどの高い地位にいた。謝覽は祖父の莊(これは先に引用した人である)・父の藩とともに「三代にわたって選部(吏部尙書)

に居り、當世もって光榮とされた」人であり、かつて新安太守となっていたときは、人なみ以上に「聚斂」したといわれている(梁書卷二五・謝覽傳)。謝舉は地方官時代に吏民から碑を立てられていて、大して聚斂はしなかったのであるが、中央では三たび吏部尙書となつて「前代に未だ有らず」と騒がれた人であり、太清二年(548)には文官最高の尙書令に就任している(梁書卷三七・謝舉傳)。そして彼は「宅内の山齋を寄捨して寺としたが、泉石の美は殆んど自然のごとく、王族たちが常に遊びに行つた」といわれるほどの大邸宅をかまえていた(南史卷二〇・謝舉傳)。先にあげた南史の記事にまちがいがないとすれば、これほどの大貴族の實の甥が漢書を質に入れて錢を借りなければ食えないほどの底の浅い經濟生活を、しかも侯景の亂以前の平時において營んでいたということを一體どう理解すればよいのであろうか。謝僞一家が何かの事情で突發的に「一朝朝食なき」事態になったとしても、そのとき班史を質に入れるなどということを考えて、なぜ叔父の謝舉に融通してもらうことを考えなかったのであろうか。

ここでまず注意すべきことは、梁代末期の首府において

食糧を得るためには錢が絶対に必要であつたことである。錢の價值が下落したときに、物をもつことが有利であることはいふまでもない。もし謝僑ないし謝舉らの一族が都の周邊に莊園をもち、そこから食糧を運ぶことができたならば、右のような謝僑一家の窮狀は起らなかつたであろう。従つてこの當時謝氏の一族は都へ食糧を容易に運ぶことのできる地域に莊園をもつていなかったことは確實である。そして彼らの収入も支出も完全に貨幣をもつて行われていたことが分る。従つてたとえ遠隔地に田園や山澤をもつていたとしても、彼らが都において貨幣經濟の上で營む經濟生活には、それらが殆んど意味をもたなかつたこと、或は急場の間に合わなかつたことを示している。すなわち遠隔地の莊園収入がなお残つていたとしても、それは錢にかえて都に送られるという習慣が長くつづいていたために、當時のインフレ時代には、それもはや殆んど意味をもたなかつたのではないかと推測される。というのは莊園からの收益を現金化する間には、先にのべたように商人が介在していたと考えられるが、その商人は鐵錢時代の混亂を利用し「姦詐」をはたらき、「これによつて利を求めた」ので

あり（隋書食貨志）、莊園からの現金収入も商人の姦詐と當時のインフレによつて殆んど價值を減じたであらうからである。かくて高級官僚にならなかつたらしい謝僑一家が先ず窮地に追いこまれ、謝舉らの一家も大邸宅に住みながら、内實の現金収入は激減して、自己の經濟を保持するのに精一杯となり、甥の面倒をみる餘裕は全くないほどに追いつめられたのではないであらうか。私は謝僑一家の窮迫という事實から、梁代末期における謝氏全體の貧困化を以上のように想像したくなるのである。もし以上の想像が大して誤まつていないとすれば、それはいわゆる北來貴族一般にも妥當するであらう。

私は以上において、南朝における貨幣經濟の進展が貴族の經濟力をどのようにして弱めていったかということを、多くの想像をまじえつつ考へてみた。それを要約すれば次のようになる。貨幣經濟の進展はまず莊園經營の性格をかえ、莊園生産物を換金する必要に迫られるとともに、その間に介在する商人や守園人の經濟的實力を高め、貴族の經濟力は相對的に低下をつづけた。そして金錢取得の必要から、貴族が間接的に商業に参加するにつれて、貴族の商人

に對する依存度が高まり、經濟的寄生者としての性格が強くなつてゆく。そして當時の貨幣的二重構造と封建的特權の系列において、貴族は一見その頂點に立つごとくに見えながら、意識の古さと聚斂能力の薄弱さによつて、その利點を活用することができず、上からは王族と、下からは新興寒人層の經濟力上昇によつて、その間に板ばさみにあつてゆく。そこにかかる消費ブームはむしろ貴族の經濟力をいよいよ消耗させ、やがて經濟的寄生者としての貴族は鐵錢價値の下落によつて、さらに經濟力を激減した、ということになる。

このような經濟的寄生者としての貴族に、最後の痛撃を與えたのは、いうまでもなく五四八年にはじまる梁末陳初の大混亂であつた。その混亂の間に貴族はどうなるか、そして混亂の收まつたのち、果して彼らは以前の力を回復できたかどうか。我々はそれを次に調べなければならぬ。それは以上にのべてきたことが、貴族の弱體化を強調しすぎているかどうかの檢證にもなると思うからである。

五 侯景の亂と貴族の社會的勢力

五四八年秋から翌年春にかけての半年に近い首府建康の攻防戰と、主として侯景の軍による掠奪暴行とによつて、建康とその周邊は徹底的に破壊され、貴族たちの生活の根據は壊滅した。その狀況を活寫するものは顔之推の「觀我生賦」である。

——佇たちわれの身となつて、昔の土地建康にかえつてみれば、そこは蠻族どもにふみにじられてゐる。御先祖の廟おたまをみては黍離の詩が思われ、荒れはてた塵まちをみれば麥秋の歌が思われて悲しい。軍鼓は倒れて用いる人もなく、かつて偉勳を記念して作られた鐘もこわれて地に落ちたまま。野はものみな枯れはてて人骨が横たわり、町は人もなくさびれて飯いをたく烟もみえぬ。昔、百家の名族たち、今は親屬すべてが亡び去つて跡かたもない。どこかでひっそりと王昭君の悲しみを奏なでる音が聞え、烏孫に連れ去られた翁主の歎なげきの絃ことがきこえてくる。(彼女らは悲慘な目にあわされた上流貴族の婦人である)。かつてわが祖父たちの住まれた長干のちまたを通つては、胸の思いのむすぼれてとけず、先祖代々の墓地・白下⑤に詣でては、去りがたき思いに心ひかれる——

五五一年、顔之推は郢州（武昌）で侯景の軍に捕えられ、俘虜として建康へ送られた。右の叙述は、彼が捕われの身を釋放されたとき、建康の惨状を目撃して、後にその印象を「觀我生賦」の中に歌いこんだものにほかならない。

このような惨状の中で何とか生き残った士人たちは、貴族をも含めて深刻な生活難に陥った。徐陵の弟の徐孝克などは、極度の食糧難のために、妻を侯景の部將に嫁がせ、自分も僧侶になって乞食托鉢してこの危機を切りぬけたほどであった（陳書卷二六・徐孝克傳）。荒廢した建康では、生活を維持することは殆んど不可能であった。かくて貴族や一般士人の多くは湘東王繹（元帝）のいる江陵へ續々と避難していった。姚察父子のごときは、一旦郷里に還っておりながら、故郷においても生活できなかったために、「朝士の例に随つて」江陵へ赴いたのであり（陳書卷二七・姚察傳）。例外は少かったとみてよいであろう。そこには職があり、食があったのである。しかるに五五四年、西魏の大軍は俄かに江陵に攻めよせてこれを包圍占領し、ここに集っていた梁の百官および一般士民は羊の如く追いたてられ、俘虜として關中に拉致されていった。その數は十萬人

以上に達し、免れたものは二百餘家にすぎなかったという（周書卷二・魏恭帝元年條）。これは南朝貴族の中樞を壊滅させる第二の大事件であった。

もっとも五六〇年に陳と北周の國交が回復して以後は、いわば捕虜交換條約が結ばれ、原則として南北に流寓した士人はおのおのその舊國に還ることを許された（周書卷四一・庾信傳）。しかしもちろん、すべての士人が歸國を許されたのではなく、また捕虜交換が迅速に行われたわけではない。彼らが長期にわたって北方に拉致されている間にも、江南の混亂はなお絶えまなく續いていたのであり、王朝もすでに梁から陳に變つていた。江南における彼らの社會的經濟的な地盤は、それがよほど根強いものでないかぎり、この間に壊滅的な打撃を蒙ったのは當然である。それは貴族の場合でも變りはなかった。その適例は次にのべるように、陳郡の謝氏において見ることができる。

かの有名な東晉の謝安から嫡系の九代目の孫、謝貞は陳書卷三二・孝行傳の中に見える。だいたい、謝安の長子から出たその嫡系は、次子から出た分家、すなわち先にしばしば引用した謝弘微の系統ほどには南朝において榮えな

ったようであるけれども、謝貞の父の謝蘭は、とにかく梁朝では三十七、八歳で兼散騎常侍になった人であった（梁書卷四七・孝行傳中の謝蘭傳）。この謝貞の傳には次のようにいう。「太清（年間、侯景）の亂にあつて、謝貞の親屬はちりぢりになって逃げた。貞は江陵で西魏に捕われ、族兄の謝暭は番禺に避難し、貞の母は宣明寺で出家して尼になった。陳の武帝が即位すると、暭は郷里に歸り、貞の母を養うこと二十年近くたって、太建五年（573）貞がやっと北周から歸ってきた」。かくて貞は陳朝に仕えて諸官を歴任し、最後に後主のとき、南平王友となった。しかし後主の出した勅令に、「謝貞は南平王のところにいて、まだ祿秩がないから、賞與として米百石をやるがよい」、といっているのを見ると、その官僚生活は甚だ基礎薄弱なものであったと思われる。事實、至德三年（583）母が死ぬと、そのあとを追つて、まだ六歳の一子を残して死ぬ。そのとき族子の謝凱に告げた遺言には次のようにいう。

—自分は少年のころに父を失い、十四歳で母方に養われたが、十六のとき太清の禍亂が押しよせて、遠國に流離すること二十年あまり。慘憺たる時世を天に號訴し、身

の置きどころのない思いをして、ひとしく感ずるところあるに至った。國に還つて母の側に仕え、先祖の墳墓を守ることができれば、わが分として充分であつたのだ。しかるに、はからずも朝廷ではこの無一文の貧弱な私をとりあげて、しきりに立派な官位を與えて下さったが、私が死んだところで、何の御恩返しもできはしない。いま病の床にあつて、命は旦夕に迫っている。ひっそりと土に歸するのにな、何もいろいろと思いを煩わすこともない。息をひきとつたのちは、直ちに死骸を野原にすてて、佛家でいう尸陀林（風葬）のやり方をとつてくれれば、誠に有難いのだけれども、ただ餘りに變つたやり方にすぎはせぬかと恐れる。だから薄板でもつて體が入るだけの棺を作り、靈車にのせて葦席むしろでくるみ、山に穴を掘つて埋めてくれ。また私は結局、兄弟が少く、他の子孫もない。わが子の靖はまだ幼少で、世間のことは閑ひまれていない。それでただ三ヶ月だけ燒香臺を置き、香水を供えて兄弟の情を盡くしてくれればよい。それがすめば、すぐそんなものは取り拂ってくれ。無駄なことはしてくるな。—

謝安から九代目の嫡孫はこうして孤獨と貧困のうちに寂しく死んでいったのである。

ここに明らかに見られることは、まず謝氏の族的背景が全く分散壊滅していることであり、謝貞のあとをみとるものは族子の凱しかなかったことである。もちろん、謝氏は彼らのほかすべて絶滅したわけではない。陳書卷二一には謝哲と謝嘏の傳があり、この二人は同じく謝安の次子から出た家系に属している。そして彼らは、梁においてそれぞれ重きをなしていた謝朓および謝朏の系統をひくもので、陳朝においても、ともに中書令などの高官になっているのである。にも拘らず、謝嘏らが困窮した同族の謝貞一家を支援した形跡は全く見えない。それは遠く謝安の子の代において、すなわち八世の祖においてすでに家系が分れているために、同じ謝氏でも禮制上では全く他人の關係になっていたからであろう。しかし、他人どころか、實の叔父と甥の間においても、すでに侯景の亂以前において、相互扶助がなかったらしいことは、先に彼らの先代に當る謝朏と謝朏の場合に見たところである。私はそのとき、謝氏が外面的には梁朝の榮譽にみちた高官であつたにも拘らず、彼

らの實際の經濟狀態は實の甥の困窮をも救うことができないほどに窮迫していたのであらうと推定した。いまや二十年に近い社會の混亂ののち、五族の範圍を脱した同族に扶助の手をさしのべることは到底不可能であつたにちがいない。なぜなら、梁末陳初の大混亂によって、彼らの經濟的地盤は殆んど完全に失われたと考えてよいからである。

侯景の亂以前において、貴族の經濟生活が貨幣經濟の進展に伴つて寄生的性格を強めていったことは先に論じたところである。彼らの莊園における守園人は次第に經濟的實力を蓄えていたし、彼らの商人に對する依存度が高まるにつれて、彼らと商人的門生との間の關係が單なる取引關係に變つていったことも先に指摘した。侯景の亂はこのような狀況において勃發した。そして大混亂は二十年近くつづいた。その間、頼るべきものはただ武力であり、土豪將帥層以外になかった。混亂期の直前まで貴族が莊園や山澤を保持していたとしても、この大混亂の過程において、貴族と守園人ないし商人的門生との間の、すでに薄くなつていた關係が決定的に切斷されたことは明白である。守園人や商人は貴族を見すてて土豪將帥の方へ走つた。いなむし

ろ、守園人や商人そのものが土豪將帥に轉化した場合も充分に考えられることである。すでに經濟的に寄生化していた貴族は、この混亂の渦中に完全に經濟的地盤を失ったといつてよいのである。かくて彼ら貴族は、かつての同族結合を再び組織することは全く不可能であり、自己の單家族を維持するだけで精一杯であつた。それはせいぜい王氏の場合のごとく兄弟が結束する程度であつたのである（陳書卷二三・王瑒傳）。このことは貴族の社會的勢力を示す一つの要素として、その族的結合の厚さが重要であつたことを思うとき、我々はやはり貴族の社會的勢力の減退を示すものとしなければならないのである。

ところでこのような貴族の社會的勢力の弱化を象徴的に示す事件がある。それは再び謝氏の場合なのであるが、先に引用したように、謝貞の念願は先人の墳墓を守ることであつたにも拘らず、その九世の祖・謝安の墓は遂に守られなかつたという事實である。五七九年梅嶺にあつた謝安の墳墓は始興王叔陵によつて亂暴にも發掘され、その柩は棄て去られた（陳書卷三六・始興王叔陵傳）。このとき謝安の嫡系にあたる謝貞はまだ存命中である。同じく謝安を祖とす

る謝哲は五六七年に、謝綬は五六九年にすでに死んでいたが、謝綬には二人の子があつて、儼は侍中太常卿にまで進んで五八八年までは生きていたのであり（陳書謝綬傳）、仙は五八五年に吏部尚書となつてゐるから、これも健在であつた（陳書卷六・後主本紀）。光榮ある祖先の墓は彼らの存命中に破壊されたのである。もつとも五六五年の詔には、いたるところで墓地があばかれ、明器の玉杯や墓中の漆簡が世の中に出まわつてゐることを述べ、「昔からの忠烈の士で、墳冢があばかれ、子孫の絶えて後なきものは取り調べて修理せよ」といつてゐるから（陳書卷三・文帝紀）、梁末陳初の混亂期に多數の墳墓が破壊されたことは確かであり、始興王が謝安の墓をあばいたのはこのような風潮の餘波と見ることもできよう。しかし梁末陳初の大混亂期にそれがあばかれたのであれば、まだしもやむを得ないということもできようが、陳朝のもとで社會秩序が回復している時期に、しかもその子孫が廟堂にあるときに、彼らの最も崇敬してゐたはずの謝安の墓があばかれたということは注意すべきことであらう。なぜなら、謝氏の社會的勢力がそのとき、以前のように回復してゐて、それに依附する多く

の賓客や門生、或は僮僕などがいたとすれば、いかに亂暴者の始興王といえども、謝氏のシンボルともいふべき謝安の墓をあばくことは恐らくできなかったであろう。私は南朝貴族の象徴ともいふべき謝安の墓が子孫の存命中に、しかも陳朝の盛期においてあばかれたということ、そして謝安嫡系の謝貞がその悲報をきいた後に、孤獨と貧困の中に寂しく死んでいったことにおいて、南朝貴族没落の象徴的な姿をみるように思うのである。

ところでいま、謝氏の社會的勢力を問題にして、それに依附する賓客・門生などのことにふれた。貴族の莊園とそれに附屬した多くの僮僕が失われ、門生の中でも商人的取引關係によつてつながるものが貴族のもとから失われたことは先にのべたところである。しかし賓客や門生が貴族に依附する理由には、本來他に大きな理由があった。それは貴族が朝廷においてもつ大きな權力にたよつて、官職を得るチャンスをつかもうと期待したからであつた。梁末陳初の混亂期に賓客門生は一たび離散したとしても、貴族がもし陳朝においてなお大きな政治的權力をもつていたならば、彼らは再び貴族のもとに依附し、よつてもつて仕官の

チャンスを狙つたであろう。従つて陳代において、貴族が再び以前のごとく依附人口を掌握できたかどうかという問題は、貴族の陳朝における政治的實力の程度と密接に關係する事柄である。そして貴族の社會的な力は、その同族が官界において占める地位の高さと多さ、つまり官界における族的なひろがりの厚みとともに、これに結びつく依附人口の多さに基づくところが大きいとすれば、貴族の社會的勢力を考える上で、この點の考察を除外することはできない。そこで次に陳朝における貴族の政治的實力の問題を考えてみよう。それはすなわち、貴族の社會的勢力の問題とも密接に關聯するからである。

六 陳朝における貴族の政治的實力

この問題についても先程からしばしば引用した謝氏を手がかりとして考えてみよう。先にのべたように、謝哲と謝綬は陳朝において中書令にまで昇進した。そして謝綬の子の儼は侍中太常卿に、儼は吏部尙書から尙書僕射にまで進んでいった（陳書・後主紀）。このような事情は王氏の場合も同様であつて、陳朝において貴族は依然として文官の殆

んど最高のポストにまで昇進しているのである。

彼らがこうしてなお廟堂にある限り、政治問題・人事問題などに關する發言權は當然もっていたにちがいない。しかしながら發言權をもっていたことと、彼らの發言が力をもったかどうかということとは全く別の問題である。先ず謝哲らが占めた中書令とは當時どのような地位であつただろうか。

中書監および令は「梁代において清貴華重の地位であり、才地ともに美なるものがこれになるのであつて、陳は梁の制度によつた」といわれている（通典卷二・職官三）。そして梁の官品表では中書令は十三班筆頭であり、十四班の吏部尙書より下であるが、陳では吏部尙書より上位になつて第三品筆頭になっている。これは中書監の官品が梁の官品表では尙書左右僕射より後に書かれているのに、陳ではそれを蹴おとして第二品筆頭に上つてゐること、および中書侍郎や中書舍人の官品にも尙書系の官に對して同じ現象がみられることと照應する（通典卷三七・職官一九）。つまり梁までは中書省よりも尙書省の方を重んじたのに對して、陳は逆に中書省の方を重んじたのである。従つて中書

監令はその長官として陳代において絶大な權力があつたはずである。しかしながら實際は「中書令は清簡にして事なく」、蔡徵のごとき權力を握つた経験のあるものにとつては、かえつて怨めしい地位であつた（陳書卷二九・蔡徵傳）。

そして陳代において實際に詔誥を掌り、國家の大事を決するものは殆んど中書舍人であつて、その長官たる中書令は名のみ重くして仕事のない閑職であつた。謝哲や謝綬のほかに琅邪の王氏も多くこの閑職についてゐるのは興味深いことであつて、それはまことに「清貴華重」として祭り上げておくには最もふさわしい地位であつた。そのことを傍證するものは、陳書の中の王氏・謝氏の傳に書かれていることが單に彼らの官歴を羅列するにとどまり、廟堂における彼らの業績や影響力を示す記事が殆んどみられないということである。

例えば謝綬は梁代には名門の貴公子として祕書郎から起家し、いわゆる出世街道をひたすら進んでいたが、一時、建安（福建省）の太守に出たとき侯景の亂が起り、地元の政情不安に恐れをなして廣州に避難した。のち中央に還ろうとしたが、途中で周迪に引きとめられ、ついで福建

の陳寶應に頼っていった。周迪も陳寶應も陳朝に對抗する獨立的な地方軍閥である。陳朝ではしきりに謝朓を召すが、陳寶應が離さず、五六四年、陳寶應が平定されたときにはじめて陳朝に顔を出した。長年敵軍の中にいたことは陳朝からみて、利敵行爲ととられても仕方がなかった。御史中丞江德藻は當然なことに彼を彈劾した。しかし文帝は彼に罪責を加えず、これを用いて遂に中書令にまで昇進させたのである。そして彼が陳朝に何を寄與したかについては一切書かれていない。陳朝は彼に一體何を期待したのであろうか。

文帝は天嘉元年(560)七月に、「王公以下、それおのの賢良を進擧すべき」旨の詔を發したが、そこに一つの例として擧げられているのは、新安太守の陸山才が蕭策と王暹とを推薦したときの啓文である。それにはいう。「蕭策・王暹は並びに世胄清華、羽儀著族であって、或は文史用うべく、或は孝德稱すべし。並に宜しくこれを朝序に登し、擢んずるに不次を以てすべし」と(陳書文帝紀)。蕭策・王暹の如き貴族に期待されたものはその文史であり、その孝德であった。顔之推がいうように、「文史の臣なるも

のは、その著述憲章の前古を忘れざる點が役に立つ」もの、端的にいえば、いわゆる有職故實に通曉している點を買われるものであって、「治體に鑒達し、經綸の博雅なる朝廷の臣」すなわち大局を見通す政治家とは異なるのである(顏氏家訓・涉務篇)。「博聞彊識にして舊章を明悉していた」袁樞(陳書卷一七・本傳)や「朝章に詳練して、もっとも聽斷に明らかなる」袁憲(陳書卷二七・本傳)兄弟のごとき立派な文史の臣が得られるならば、まだ幸とすべきであった。實際には當時一般にそのような立派な貴族は實際には少かった。顔之推が痛烈に皮肉っているように、「梁朝全盛のとき、貴遊の子弟は學術のないものが多く、『車にのって落ちなければ著作郎、お體いかかと挨拶すれば祕書郎』と巷でハヤされるほどの有様であった。……それが亂離の後になると、銓衡選舉にあたるものはや以前の顔見知りではなく、要路の權力者には昔の與黨が見られない。身をふりかえてみても、中身は空っぽで、世に出そうにも、何の役にも立たぬ。化けの皮は剥ぎとられて、貧弱な中身が暴露され、……戎馬の間にウロチョロして、どぶ川のほとりにのたれ死にすることになった。こういうと

きに際しては、彼ら貴遊の子弟は全くデクノボウなのである」(顔氏家訓卷三・勉學篇)。デクノボウであるにしろ、のたれ死にを免れて、戎馬の響きがおさまった陳代文帝のころまで、生き残りえた貴遊の子弟は何といっても稀少價值があった。彼らの身邊にはすぎ去った華やかな時代の文化の香りがただよい、故事舊章をよく知っている上に、育ちのよさを示す「徳」があった。それは田舍侍にとってやはり大きな魅力であり、彼らをかかえておくことはそれだけで自己の高尙さと文化性を示すように思われたであろう。周迪や陳實應が謝叡を手もとに引きとめたのは、恐らくそういう意味があるように推測される。陳朝は本質的には周迪や陳實應と變らない田舍侍たちの寄合世帯として成立した。従って陳朝において、かつての貴遊の子弟が「不次を以て擢んでられる」のは、周迪や陳實應が謝叡を引きとめた意味と大して變りはないと思うのである。陳書に見える貴族たちの傳において、これといった特徴も業績も記されず、ただ主として官歴だけが記されているような人々は、顔之推のごとく^{デクノボウ}鴛才と呼ぶのは酷であるとしても、陳朝に文化的色彩を添えるという點にその最も大きな存在理

由があったと考えられるのである。

ところで、王氏や謝氏が中書令の如き閑職以外に、尙書省の長官になっているのは果して彼らの政務擔當における有能さを示すものであらうか。尙書省は何といっても實際の政務處理を必要とする官衙であって、その最高幹部たる左右僕射や吏部尙書になれば、そう閑閑としていられないはずである。しかし政務處理の實狀は左右僕射と吏部尙書のうち、誰か有能な一人が中心となって事を處理していたようであって、先にあげた袁樞や徐陵、或は中書舍人から出た孔奐や毛喜などが次々にその中心的人物になったのである。⑩そしてこれらの人々は家柄としては二、三流、或は寒門といってもよいクラスに屬しており、このようないわば中堅士人層が尙書省において國家機密を參掌するのは梁代から見られた現象である。⑪しかし梁代末期から陳代に進むと、國家の機密を參掌し、軍國の大事を裁決するものは中堅士人層からさらに下級の、舍人省にたむろする寒人層の手に移っていった。⑫かくて陳代における尙書省はいわば單なる執行機關となってゆくのであって、徐陵が獵官者に告げて、才能と門胄を考慮すると宣言しているのは(陳書

卷二六・徐陵傳)、寒人層の攻勢に對して尙書省に據る中堅士人層の抵抗を意味すると解することもできるのである。

舍人省を占める寒人の擡頭は宋の孝武帝時代以來の現象であつた。それ以後、宋齊時代の中央政界は貴族對寒人の鬭爭場となつていつた。梁の武帝はこの鬭爭を收拾するために、中堅士人層を中心として政府を構成した。しかしその末期からは、政治の中心はさらに下級の寒人層に移りはじめ、陳代においては寒人層の完全な勝利をもつて終る。

先にのべたごとく、中書省系職員の官品が尙書省系職員のそれを抑えてその上に出たという事實は、舍人省にたむろする寒人層の實力が尙書省の幹部を抑えてその上に出たという政治力の推移を、官制の上で端的に表わしたものと考へることができる。かくて貴族は梁代から次第に政界の片隅に祭り上げられ、陳代に入つてはいよいよ政權の中樞から全く浮き上つてゆく。そこでは中堅士人層さえも寒人層に壓迫され、ついには江總のごとくデカダンスに身を任せざるをえなくなるのである。

貴族は陳朝においても確かに中書省や尙書省の最高首脳部に名をつらねていた。しかしそれはちょうど日本の幕府

時代における京都の公卿たちが、依然として大臣を稱しているのと似たようなものであつた。彼らはまさに有職故實に博識であり、古今傳授にも似て、過去の文學を傳えていた。しかし現實の政治の實際は彼らとは別のところで動いていたのであり、彼らはそこから完全にとり残された存在でしかなかった。ただ日本のごとく、皇室と公卿とを實際の政權とは別の場所に、文化的傳統のシンボルとして別置するという便利な方法を中國では案出しなかった。中國ではそれが同一の政府の中に混在していた。従つて同一の府要員の中で、どこまでが實際の政權擔當者であり、どこからが文化的傳統のシンボルであるかの區別は、日本におけるほど簡明直截ではない。しかし實利を求める人々が皇居に向つたか幕府に向つたかおのずから明らかであるように、陳代においても實權のない貴族のもとに伺候するものはもはや殆んどなかった。貴族が失つた嘗つての依附人口はもはや再び彼らのもとには歸つてこなかったのである。それは貴族自身の族結合の稀薄化と相俟つて、貴族の社會的實力の完全な喪失を意味するものであらう。

七 結 語

以上において私は陳代において貴族が政治的社會的に現實を動かす力を殆んど喪失していたことを證明したつもりである。それは南朝を通じて進行してきた貴族の經濟社會的實力喪失過程が最後に行きついた姿であり、それを決定的たらしめたのは梁末陳初の混亂期にほかならない。そしてこの混亂期以後における彼らの餘映は全く文化的傳統のシンボルとして、床の間の置物として飾られていたにすぎなかった。このような一握りの置物を處理するには、隋の江南平定によって北方にもってゆくだけで事は片附いたのである。我々は南朝貴族制の崩壊をそれが完全に姿を消すまで待つ必要はない。日本史上において京都の公卿はいつまでも残っていたけれども、鎌倉幕府以後を人は貴族時代といわないように、或はさらに一層適切な比較をもってするならば、應仁の亂後の織豊時代を人は貴族時代といわないように、我々もまた侯景の亂後になお貴族が残っているからといって、それを貴族制の時代と呼ばねばならぬ理由には毫も存在しない^④。私は以上の考察からして、侯景の亂

をもって南朝貴族制の終りと斷定してよいのではないかと思う。すなわち三世紀から六世紀の半ばまで、つまり魏晉以來、梁に至るまでの、いわば中世前期の貴族制は、北方蠻族の支配下に成立して隋唐に及ぶ後期貴族制に直接つながるものではないのである。そしてこの前期貴族制を崩壊せしめたものは、北方の武力であるというよりは、むしろ根本的には南方において擡頭してくる新興階級であった。北方の武力が壓服したものは、すでに絶滅寸前にあった前期貴族ではなく、むしろ貴族をはねのけて擡頭してきた南方の新興階級であった。それをどのように壓服し、或は懷柔したか、それは次の時代の最も興味のある問題であろう。(一九六二・二・一六)

註

- ① 「侯景の亂と南朝の貨幣經濟」東方學報京都三三冊。以下の本文において、これを「別稿」と略稱する。
- ② 守國人という言葉は、後に引用する宋書卷七七・柳元景傳に見える。
- ③ 宋書卷五四・孔季恭傳に附する孔靈符傳參照。
- ④ 例えば梁書卷二に載せられる琅邪の王氏などがそれである。王瞻は晉陵太守のとき「潔己爲政、妻子不免飢寒」といわれ、王志は宣城內史のとき、「清謹有恩惠」と記され、王

泰は新安太守として「和理得民心」といわれる。民から碑を立てられたものは、後にあげる謝舉などがそれである。貴族の中にも聚斂するものは勿論ある。しかし賀琛らがのべるような、當時の地方官の聚斂（梁書卷三八）に比べれば、比較的清廉であったように思われる。

⑤ 北齊書卷四五・顔之推傳。本文の譯は昭和三十五年秋、宇都宮清吉教授が顔之推の傳記を中心とした集中講義を京都大學で行われたとき、私が聴講して教授の名譯を筆記したノートに基づいたものである。勿々の間に筆記したため、書き留められなかったところは私が補った。教授の名譯とユニークな顔之推研究が早く出版されることを望んでやまない。

⑥ 唐六典卷九では、梁の「中書令の班は第十四」とあり、通典と異なるが、十四班であったとしても、十五班における僕射と監の順序のごとく、吏部尙書より後に並べられていたであろうと思う。

⑦ 陳將相大臣年表および、それに出てくる尙書省幹部の傳を照らし合わせると、大體五六〇年代前半は袁樞、六〇年代後半から七〇年代中ごろまでは徐陵、七〇年代中ごろから八〇年代はじめまでは孔奐と毛喜、それ以後、尙書省を總裁した江總は政務をみないで、後主と日夜後宮に宴遊したので有名で

ある。

⑧ 袁樞は一流と稱してよいのであるが、この一家には梁代の袁昂や、袁樞の弟の袁憲などに見えるように、鯁骨の氣風が流れていて、一般の貴族とは少しく趣を異にするように見える。

⑨ 梁代尙書省を實質的に切りまわした人は、五〇〇年代は范雲と沈約、五一〇年代は袁昂あたりらしいが、五二〇年代になると徐勉、五三〇年代は何敬容、五四〇年代になると、實權は尙書省から離れて、寒人の朱异などの手に移っていったようである。右の外に尙書省以外に周捨が重要である。

⑩ 陳代では例えば陳書卷二九にのっている人々の傳を参照。

⑪ 唐六典卷九には「陳氏監令品秩依梁。中書分爲二十一。可各掌尙書諸曹。總國機要。而尙書唯聽受而已。」とある。

⑫ 岡崎博士はさらに進んで、梁の武帝時代に「最早事實上南朝特有の貴族制が消失したものと考えて差支えない」とまで言っておられることを我々は想起したい（『通史』五九八頁）。

梁代の政體は確かに南朝特有の貴族制ではなくなっているとしても、なおその修正型と考え、その決定的な崩壊を梁末陳初の亂に求める方が穩當ではないかと考える。

text of the history of Buddhism and that of thought at large in the Six Dynasties. With this in view the author analyzes the impact of Buddhism on Hsi K'ang on the one hand and his influence on Chinese Buddhism on the other. With regard to the first point the author makes close examination of Hsi K'ang's life so far as it relates to Buddhism, while as to the second Hsi K'ang's Taoistic philosophy—realization of eternal life—is explored in order to ascertain what role Hsi K'ang played in the Six Dynasties in introducing and developing Buddhism.

The Decline of the Aristocracy in the Southern Dynasties Period

Yoshio Kawakatsu

The author approaches the problem in its economic aspects. As he has already discussed in his article, "The Revolt of Hou Ching 侯景 and the Money Economy in the Southern Dynasties Period" (*Tôhō Gakuhô*, Kyôto, Vol. 32, 1962), in that period the development of the money economy reached a much higher stage than has heretofore been believed. The economic basis of the aristocracy, which depended upon the productivity of their manors, was destined to decline in the face of their need for cash money. This need forced them to sell agricultural products for money, and, consequently, the nobleman's position was gradually taken over by the merchants as the money economy developed. Simultaneously, the stewards in charge of the aristocrats' manors took advantage of their position to accumulate cash money. In such a situation the traditional aristocracy became more and more dependent upon these stewards and wealthy merchants, so that by the middle of the sixth century after the revolt of Hou Ching, which caused disturbances for a period of about twenty years, the nobles lost the basis of their economic power. With the loss of their economic stability the nobles were forced to disband the large family system, thus losing their dependents, known as *ping-ko* 賓客, *men-shêng* 門生, *ku-li* 故吏 etc. The decline of the nobleman's economic and social influence led to the loss of their political power. In the Ch'ên dynasty, which

came into existence after the political disturbances, the prestige of the aristocracy depended solely on the cultural traditions which they carried on. The aristocracy, which had originated in the Wei and Chin dynasties of the third century and had continued down to the period of the Southern dynasties, was completely destroyed in the revolt of Hou Ching in the middle of the sixth century.